

極北の地フェアバンクスのマジックデー*

田中 博**

今日でも、多くの人々が、アラスカは一年中雪に覆われていると思っている。エスキモーは氷を積み重ねて造った丸屋根のイグルーに住み、白熊がまわりを歩きまわっていると思っている人が多い。アメリカ西海岸から飛行機で日本へ向う旅行者は、ロッキー山脈からアラスカ山脈に至る白銀の世界に強い印象を受け、そこからアラスカのすべてを推測してしまうのかもしれない。

初めて私がフェアバンクスを訪れたのは4月下旬であった。シアトルを過ぎると飛行機の窓から見える景色は、雪深い山々、氷河、そして凍りついたまま曲りくねる川ばかりで、陸の孤島、極北の地フェアバンクスへ向かっているのだという冷たい先入観を抱いた。空港に着いて驚いた事は、フェアバンクスの町にはそれまで見えていた雪がほとんどない事と、出迎えに来てくれていたDavidが半袖姿であった事である。確かにその日は半袖でも悪くない気温であった。

フェアバンクスの気温は一年を通して大きく変化する。春分後の強い太陽放射に加えて内陸性気候独特の激しい気温変化が数日のうちに雪をすべて解かしてしまう事は私は後で知った。日本からの夏の旅行者の多くがジャケットを持参し、暑さで逆に閉口した話をよく耳にする。

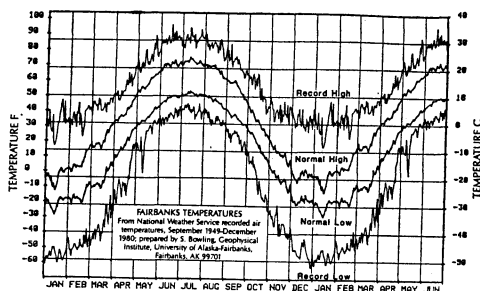
ここは北極圏に近いので、日の出、日の入りの位置が日を追ってみるみる移動するのがわかる。冬至にはほぼ真南の方向にわずかの時間だけ顔を出す太陽が、半年後の夏至には、ほぼ真北に数時間だけ没むようになる。約180日で180度日の出の位置が変化するわけだから、1日に1度ずつ、そして1カ月で30度方向が移動することになる。日本では1日周期で昼と夜が交代するわけであるが、ここではそれに加えて、1年周期で明暗が交代する。北極点では、昼と夜が概念が1日という概念から完全に分離し、1年という概念に移行する。この事は理屈ではわかっていても、生理的にはなかなか納得のゆかない

* A magic day of the farthest north city, Fairbanks.

** H.L. Tanaka, 筑波大学地球科学系.

1991年12月

Fairbanks



いところがある。

夏至の頃にイーグルサミットという山頂で没まない太陽 (mid-night sun) を見た事がある。ここは山頂であるため、北極圏外でありながら没まない太陽を見ることが出来る南限である。色とりどりのツンドラの小さな花が山頂付近を埋め尽くす中で、mid-night sun の連続写真を撮った。円弧を描きながら没みかけた太陽が地平線の上をころがるように移動し再び登っていくのは素晴らしい光景であった。ちょうど山頂では天気が急変して霧雨となり、南の空にほとんど360度の円弧を描いて虹が出た。その中央で見たブロッケン現象による自分の影は忘れられない思い出となった。

短い夏の間、フェアバンクスの町はマリーゴールドやペチュニアなどの花で飾られ、世界中からの旅行者で賑わう。キャベツやズッキーニは日照が続くかぎり成長するため異常な大きさになる。夜の無い、つまり朝のないフェアバンク스에서朝顔の花が咲くものかどうか実際に植えて観察したことがある。その結果、夜が始まる8月末には花を咲かせる事ができたが、9月上旬の突然の初霜で無残にも全滅してしまった。そのまま気温は急降下し9月末に初雪、そして10月には根雪が積り、長い冬が始まる。オーロラが毎晩のように現われ、新たな観光シーズンが始まる。

近年の solar max により、毎年4,000人近くの日本人

がオーロラ見たさに冬のフェアバンクスを訪れるが、冬の観光客は、ほとんど日本人である事を地元の人はよく知っている。-30°Cの闇夜の中で何時間も立ち続け、感激して帰ってゆく日本人は、オーロラを見慣れた地元の人には、何かがありすぎて何か欠けているという印象を与えるようである。

真冬の-40°Cの世界は体験してみなければわからないであろう。フェアバンクスでは気温が-40°Cを下まわる日が、年に平均して6日ある。自動車の排気ガスが飛行機雲のように後に残り、それが溜まって町中がアイスフォッグに包まれる。自動車、家、発電所などの水蒸気源のない郊外にアイスフォッグは見られない事から人為的大気汚染と考えられている。そんな日には面白い実験がいろいろできる。熱いコーヒーをカップから空中に撒きちらすとシューッという音とともに蒸発し、下には一滴も落ちずに褐色の霧が目前に残るのみである。シャボン玉は空中で凍り雪の上に落ちてコロコロと転がってゆく。バナナで釘が打てる。スキーもスケートも滑らな

い。涙が凍って目が開けにくくなる。駐車していた車のタイヤはその重さで四角くなる。一度試しに防寒ズボンなしで-40°Cの中を歩いてみたことがある。15分程歩いたところで足が痙攣を起こし、人のいない場所で立往生しそうになったが、なんとか家までたどり着いた。冬の話は尽きないが、繰り返し体験したくはないことが多い。

やがて春分が過ぎると、気温が急上昇し、スキーも車もよく滑るようになる。4月になって気温が0°Cを越えると半年以上存在していた雪が数日で解けてなくなってしまう。気温上昇が急激であるがゆえに雪解けの時期は毎年正確にやってくる。従って仕事のスケジュールはたてやすい。雪解け10日後がマジックデーである。この日を境に長かった冬の事は忘れてしまう。アラスカは一年中冬と思っているような友人を招待するなら、このマジックデーに予定をセットし、その上半袖姿で出迎えたなら、きっとフェアバンクスに好感を持ってくれるに違いない。

国際学術研究集会への出席補助金受領候補者の募集のお知らせ

国際学術交流事業(天気32巻5号参照)の一環として、国際学術研究集会への出席の旅費もしくは滞在費の補助を下記により行いますので、希望者は期日までに応募願います。

記

1. 対象の集会

A: 1992年6月1日~11月30日および

B: 1992年12月1日~1993年5月31日

の期間外国で開かれる国際学術研究集会

2. 応募資格

日本気象学会会員で国際学術研究集会に出席し論文の発表もしくは議事の進行に携わる予定のもの。

3. 募集人員

若干名

4. 補助金額

アメリカ・ヨーロッパ地域 15万円

その他の地域 10万円

5. 応募手続

所定の申請書類(日本気象学会事務局備付)を期日までに国際学術交流委員会(〒100 東京都千代田区大手町 1-3-4 気象庁内日本気象学会気付)に提出する。大学院生は指導教官の推薦状を併せて提出する。

期日: A 1992年2月28日

B 1992年8月31日

6. 補助金受領者の選考・義務

当該集会終了後30日以内に委員会に報告書を提出する。